寄稿

女性技術者からひとこと

応用地質㈱　大　迫　玲　子

大学では、就職活動の少し前まで、土質や地質とはあまり関係のない「水」（主に水質や水理）を専攻していました。卒業論文には力を入れましたが、普段は海や川を求めて自転車や原付バイクで出掛け、夜明け前から日が暮れるまで海を眺めていることが多い日々でした。

振り返ってみれば、今に至るまでに、いろいろな転機がありました。

世界を夢見て外国語を勉強したい！と文系一色だった私が理系に転向したのは、受験を間近に控えた高校３年の頃でした。でも、それは当時話題になっていた「バイオテクノロジー」に興味を持ったからです。生物を勉強していくうちに次第に水生生物に的が絞られ、さらにそこから水環境へと興味が移ってきました。土質や地質という言葉を耳にしたのは、もっと後になってから…就職活動を始めた頃です。その頃、「事務職は自分には向いていない。私は外で仕事したい！」と漠然と思っていました。その後は、半ば成り行き任せで今の仕事にたどり着いたわけですが、「外で仕事がしたい」という願いが叶った！とやる気満々で辞令を待ちました。

…が、現実はカルチャーショックの連続でした。

ボーリング自体初めてです。「現場へ行って来い！」と上司に言われ、初めて現場へ出た時に、「女の子は危ないよっ！」と注意され、しりごみするようになってしまいました。「技術的に未熟だから」というのであればまだしも「女の子は…」というのが引っかかり、「現場をみなければならない」と「危険だら近づけない」の間でどう振る舞えばよいのか、分からなくなってしまったのです。…ただ、変な話ですが，「そうか、私は女の子なんだ」とちょっぴり嬉しかった（？）気もしました。大学の研究室やサークルでも男の人ばかりの環境で、特に「女だから」と言われたこともありませんでしたし、自分自身でも女だという自覚に乏しかったからでしょう。「ワケの分からない姉ちゃんが来た」と思われたのは、やはり技術的に未熟であったからだと思います。確かに実際に作業したことはないし、当時の私は、仮にオペレーターさんに相談を持ちかけられても指示はできなかったでしょう。実際にやったことのない人間が指示を出す…これは、どこかしっくりいかず、大変気持ちの悪いものです。あまりにも初めてのことだらけで何から手を付けて良いのか分からないまま、担当業務だけは増えていき、ひたすら焦っては悩んでいました。

そんな時、大学の研究室でお世話になった先生から夜中に電話がありました。周囲の流れについていけず、悩んでいることを打ち明けたところ、「専門分野をちゃんと勉強してきた他の人たちと比べたら、入社してスタートラインに立った時点で、専門の違うあなたはすでに遅れをとっているのだから、人の何十倍もの努力を覚悟していたはずでしょう？周りをみて焦る前に、３年後、５年後、10年後に自分はどんな技術者になっていたいか、落ち着いて考えてごらん。そうすれば、目標がみえてきて、やるべきことも見えてくるんじゃないかな…」とアドバイスを受けました。この言葉には、今でも壁にぶつかったときにお世話になっています。

それから自己分析（？）が始まりました。目標をたてる→実践→結果からどこが問題だったのか考え、フィードバックしながら次のステップに進

む…方向性を確認しながら業務を進めていく習慣は、このとき始まりました。

入社して4～5ヶ月後、最初の目標を「現場技術を勉強して、オペレーターさんに相手をして頂ける存在になろう！」にしました。かなり初歩的なことで笑われるかもしれませんが，これは技術者としてやっていく際に避けて通れない基礎分野だ！と考え、とにかく原位置試験を中心に文献を読みあさりました。…そのうち、原位置試験よりも掘進技術のほうが奥が深い！ということが分かってくるのですが。

5年半経った今の目標は「現場の工程管理を安全に、かつ能率よく行う」です。お施主さんの要望、現場の声など、さまざまなニーズに応えていくためには、一本太い芯を設定し、T・P・Oに応じてフレキシブルに対応できるような工程管理が望まれます．そのためには、知識に加えて、瞬時にいろいろな角度からモノをみて総合的判断ができる力が必要だと思います。「いろいろな角度からモノをみる」…これは、意外と大学で所属していた落研（落語研究会）で鍛えられたような気がします。もともと引っ込み思案を克服して度胸をつけるために入った落研でしたが、みなさんは「大喜利」というのをご存じでしょうか？あるお題に対して「オチ」をつけるゲームのようなものです。1つのテーマに対して、実にいろいろなオチが出てくるわけですが、それは、ものの見方がそれだけあるということです。さすがに仕事に「オチ」は付けられませんが、問題点やあるテーマに対し、自分の考えを客観的にみながら持論をまとめていく際に役に立っているような気がします。…ちなみに、あまり大きな声ではいえませんが、現場でちょっと待ち時間ができると「“モンケン自沈”と掛けまして！」等と1人でナゾ掛けをやっていることがあります。自信作は秘密の野帳（?）に書き留めて、いつか技術にまつわるショート落語が作れたら…などとニンマリしています。お施主さんやオペレーターさんと話をしていてもキラリと光るネタを発見することがあり、何だかとても特をした気になることもあります。

私の最大の弱点は知識と経験が少ないことですが、これはこれから時間をかけて確実に克服していこうと思います。いつもギリギリではなく、ナゾ掛け1つできるくらいの余裕を忘れない、そして何よりも「安全第一」で、お施主さんにもオペレーターさんにも精一杯の心配りができる「円い技術者」…これが私の理想の技術者像です。欲張りですが、できるところから目標をたてて今後もがんばっていきたいです。「女性の技術の担当の方」ではなく、1人の「技術者」として認めて頂ける日を夢見て…